日本経済新聞（夕刊）

1999年（平成11年）3月15日（月曜日）

現代人のカルテ

前立せん がん

男性ホルモン抑制必要

六十八歳のA氏は、排尿時の勢いが衰えたことに気付いた。友人からも、そろそろ前立せんの病気に気を付ける年だと言われていたので、思い切って駅前の泌尿器科で診察を受けた。一通りの診察、超音波検査、血液検査の結果、前立せんに硬くはれた部分があり、血中の前立せん特異抗原の数値も高かった。医師は大学病院で精密検査を受けることを勧めた。

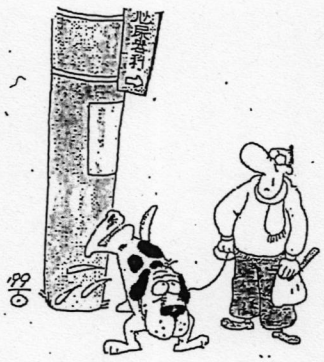
大学病院では核磁気共鳴画像装置（MRI）検査や、前立せん組織を針で一部採取する生検という検査が行われ、前立せん癌（がん）と診断されたが、幸い癌は前立せんの外には出てないとのことだった。通院で約四カ月、男性ホルモンを抑える注射と内服を続けた後、入院を指示され、前立せんの全摘出手術が行われた。術後、せきやクシャミをすると少量尿がもれるようになったが、それも徐々に改善してきている。

前立せんは膀胱（ぼうこう）の出口、すなわち尿道とのつなぎ目のところに尿道を取り囲むような形で存在する臓器で、精液の一部成分を分泌している。これが癌化したものが前立せん癌である。欧米ではとても多い悪性腫瘍（しゅよう）で、我が国でも近年増えてきている。症状としては、前立せん肥大症と同様に、尿が勢いよく出なかったり、排尿が終わるまで時間がかかることや、頻尿、残尿感などが挙げられているが、何も症状を自覚しない場合もある。

前立せん癌のユニークなところは、男性ホルモンの影響を受けて大きくなることで、この性質を治療に応用する。女性ホルモン製剤や、男性ホルモンの分泌を抑える薬剤を使うことで、前立せん癌は小さくなる。ただ、Aさんのように前立せん癌を摘出し得た場合は良いが、リンパ節や骨に転移をしている場合は、いったん癌が縮小しても、後に癌がホルモン抵抗性となり再び進行することが多い。

前立せん癌が男性ホルモン依存性に変わる仕組みや抗男性ホルモン療法抵抗性になるメカニズムについては、九〇年代に入って分子生物学、細胞生物学的アプローチで解析が始まり、我々泌尿器科医はその成果に期待しているところである。

（大阪市立大学医学部助手　川嶋　秀紀）



イラスト・及川　百合子